SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol. 99

2024. 8

年間テーマ　～あきらめない　平和への道を　ともに～

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784　FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/https://sinapis.osaka.catholic.jp/

巻頭言

平和の道具となるように

シナピスセンター長　松浦 謙

わたしがアメリカのカトリック大学で開かれた研修会に出席した時のことでした。たまたま隣に一人の中国人の女性が座っていました。わたしが日本人であることを知った彼女はわたしと暫く口を聞こうとしませんでした。戦争で自分の父親を日本兵によって殺されたのです。わたしは改めて戦争の傷が今も残っていることを感じました。大変重い気持ちでした。

研修会の最終日にミサがありました。ミサが終わったあと、彼女はわたしに近づいてきて言いました「過去を変えることはできません。けれど、わたしはゆるす心を持とうと思います。互いに和解し、前を向いて一緒に新しい未来を築いていきましょう」

心に感動を覚えました。今日のこのことを忘れないようにしよう。そして平和な世界の実現に向けて地道に努力を続けよう、と改めて思いました。

沖縄平和記念公園の広場に、「平和の火」というモニュメントがあります。円形の台座には東シナ海とアジアの国々の地図が描かれ、中心が沖縄になっています。そこに円錐形の塔があり、そこから水が溢れ流れて波の輪が周りに広がっていました。ここから平和が始まるように、という願いが込められていると感じました。

平和は神様からの賜物です。マザーテレサは「わたしはクレヨン。神様がそれで絵を描きます」と言われました。わたしたちも「平和の道具」になれれば幸いです。平和はまずわたしたちの一番身近なところから始まります。それはちょうど池に小石を投じたら、波の輪が広がっていくようです。

広島在住の在日韓国人２世で被ばく者の方が、平和の集いでご自身の体験を語られた時に言われました。「どうしたら世界が平和になるでしょうか？平和は互いに優しくすること。人を大切にして関わることです」と。わたしが今、置かれた場所で人と人との間に平和を実現することが世界の平和につながっていくのです。

共に祈ること、特にミサは、わたしたちに知恵と力と勇気をもたらす尽きない源泉です。キリストに結ばれて、真の平和を実現させることができるように祈ろうではありませんか。

年間テーマ

～ あきらめない！　平和への道を ともに～

身近なことから世界に至るまで、互いを思いやれないことで生じる衝突が後を絶ちません。剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイ 26:52）と言われたイエスの生き方に倣い、暴力に打ち勝つ強い信念をもち、交わりを通して互いを理解し尊重しあえる平和の実現を目指します。このニュースが皆さまといっしょに考え、わかちあいの場となることを願っています。

平和旬間が始まります！

８月６日から 15 日までの 10 日間は、「日本カトリック平和旬間」です。カトリック大阪高松大司教区の今年の平和旬間のテーマは、「いまこそ平和を　ー苦しむ人びとの声に耳を傾け応えていこうー」です。

平和旬間のあいだ、各小教区では平和を祈り、平和を考え、平和について語りあい、平和のために行動する機会になることを願い、平和祈願ミサや祈り、分かち合い、さまざまな学習会、上映会、講演会、署名活動などがおこなわれます。

右の QR コードは、各小教区での平和旬間の案内やチラシを集めた、「平和旬間 2024 開催案内集」のリンク先です。スマホで QR コードを読み取って、ダウンロードをお願いします。興味深い取り組みがありましたら、ぜひ足を運んでください。

＜平和旬間 案内集＞

今年のテーマは、ウクライナ、ガザにおける戦闘など、現代の世界情勢を意識したものです。1981 年訪日した聖ヨハネ・パウロ２世は「広島平和アピール」の最後に祈りました。

「神よ、私の声を聞いてください。それは個人の間、また国家の間でなされたすべての戦争と暴力の犠牲者たちの声だからです。
神よ、わたしの声を聞いてください。それは人びとが武器と戦争に信頼をおくとき、いの一番に犠牲者として苦しみ、また苦しむであろうすべての子どもたちの声だからです」。

今年も巡ってくる平和旬間において、特に、戦争や、武力による争いによって、愛する人を失い、悲しみ、苦しむ人びとの声に耳を傾け、死と破壊をもたらす戦争が１日も早く終わることを祈りましょう。そして単なる願望でなく、今、自分自身の置かれた場で、キリストの平和を実現するために何が出来るかを共に考え、行動に移しましょう。

大阪高松大司教区 社会福音化部門長 酒井俊弘補佐司教

“戦争を生きた人”から私たちが学ぶべきこと

阿倍野教会　文：嶋田 奈々　絵：有谷絢

戦後 79 年を迎える 2024 年６月 23 日。私は沖縄で祈っていました。コロナ前は毎年８月６日に合わせて中高生を引率し広島巡礼を行い、原爆の悲惨さと平和の尊さについて学び考える活動を教区の青年有志で行ってきました。コロナウイルスの流行により広島巡礼を行うことが難しくなりましたが、流行が少し落ち着いたタイミングをみて青年のみで長崎巡礼を行い、戦争・原爆の悲惨さと平和の尊さを考えることを続けていました。今年は沖縄に行き、沖縄戦について学ぶことができました。私が今まで学び・考えたことを皆さんにも共有し、一緒に平和を作っていけたらと思います。

2 日間で様々な所を周りましたが、特に印象に残っているのはガマ（自然にできた洞窟）に入ったことと沖縄全戦没者追悼式の様子です。

ガマは南城市にある糸数アブチラガマという所に行きました。ここは全長 270m のガマで、戦時中、当初は住民の避難場所でしたが、日本軍の倉庫などとして使われ、戦場が南下するにつれ陸軍病院の役割も果たしました。ガマの中は見学用に整備などはされていないため足元が悪く、光もほとんど入ってきません。懐中電灯を消すと真っ暗で何も見えず、恐怖すら感じる場所でした。

ガマの奥のスペースは負傷し脳症になった兵士を収容していたようです。そこから出ることは許されず亡くなっていったと聞いた時には、鳥肌がたち心臓が締め付けられました。この暗闇で一生を終える恐怖は計り知れません。

＊有谷 絢さんの絵は印刷が難しく、右の QR コードからご覧ください。
タイトル 『いや～　ここで 3 ヶ月無理でしょ。貝になりたいという表現わかるわ～』

23 日の沖縄全戦没者追悼式は、糸満市にある平和祈念公園で行われました。追悼式は“静か”という印象を強く受けました。広島での平和記念式典は街の中心地ということもあると思いますが、黙祷の時でさえ、普段通りの生活をする人、デモ隊などの何かを訴える音で溢れています。戦後しばらくは電車やバスは８時 15 分には止まって黙祷していた、という話を聞いたことがありますが、現在は普段通りに動いています。

沖縄の追悼式の場所は街の中心地ではなく、追悼式当日、会場である平和祈念公園は一般車両は立ち入り禁止になっており、とても“静か”な式でした。周りで様々なことを訴えている人たちの声も黙祷の際は会場内には聞こえなくなり、皆一緒に祈っている感覚になりました。

平和祈念公園内にある平和の礎（いしじ）には、国籍・軍人・民間人の区別なく、沖縄戦で亡くなられた全ての人の名前を刻み、世界の恒久平和を願い建設されたそうです。国内外問わず、亡くなられた方全ての名前が母国語で刻まれており、この戦争は被害者・加害者ではなく、「一人一人の尊い命が奪われた悲惨なものだ」と訴えられていると感じました。

余談ですが、親族の名前の前にシートを敷いて家族でお弁当を食べている姿がありました。沖縄らしさが感じられ、これも印象に残っています。

沖縄全戦没者追悼式が行われた糸満市にある平和祈念公園からの景色

今春、祖母が帰天しました。96 歳でした。祖母との思い出は楽しかったことで溢れていますが、同じように印象に残っているのは戦争の話でした。

「あの当時は竹やり訓練しろって、ゆうてな。アメリカは飛行機で来るのに竹やりなんかで勝てるわけないわ」と、まるで笑い話をするかのように話したり、「アメリカの飛行機が頭の上に飛んできて銃を撃って来るんや。急いで道の下に隠れてな。すぐ隣をバーっと銃弾が横切って、あれは本当に恐ろしくて」と、昨日のことのように話したりしました。

祖父母揃って聞いてもいないのに戦争の話を私に話していましたが、私はこの話を聞くのが嫌いでした。怖い話ですし、そもそも“昔話”だと子どもの頃は感じていたからだと思います。でもそれは“昔話”なんかではない、と最近強く思います。

今、私の周りには「聞いてもいないのに戦争の話をする人」はいなくなりました。それどころか戦争体験や被爆者証言を聞こうと思っても聞くことができない時代がすぐそこにきています。戦争を体験した人が必死に伝えてきたあの悲惨な戦争。風化させず、次の時代に繋（つな）いでいくことが、まず私たちがしなければならないことだと思います。

祖母のように“戦争を生きた人”に私たちがならないように、世界中から“戦争を生きている人”がいなくなるように、私たちは過去を学び続け、これからについて考えなければならないと強く感じます。“過ち”を繰り返さないために。

シナピス　フィールドワーク
「徳島大空襲を学ぶ＆徳島教会との交流」報告

実施日時：２０２４年６月２２日（土）午前１０時～午後３時４５分
実施場所：徳島市内＆カトリック徳島教会
講　　師：徳島県立博物館　学芸員　松永友和（歴史担当）
参 加 者：１９人　　主催：カトリック和泉教会
共　　催：カトリック大阪高松大司教区
　　社会活動センター・シナピス

主な内容：

7:００　　和泉教会出発（ワゴン車３台に分乗）
10：00～　「徳島大空襲の史跡を歩こう」
　　阿波おどり会館～寺町～高原ビル

① 本覚寺の土塀　寺町一帯は徳島大空襲で焼け野原となった。
空襲による火災の高熱で壁土が焼け落ち、土塀が崩れた状態のまま今も残っている。

② 東宗院　徳島大空襲で唯一焼失を免れた山門が残っている。
焼け出された人たちはこの山門でしばらく生活したという。

③ 春日神社　眉山の中の山のひとつである大滝山の東麓にある。
徳島大空襲により、絵馬堂を除いてすべて焼失。
春日灯篭に、焼夷弾が直撃し欠損したと思われる痕跡がある。
石畳に焼夷弾が突き刺さった痕跡が残されている。
焼けただれた狛犬も残されている。

④ 常慶院滝薬師　鳥居龍蔵（歴史研究者）の祖父が寄進した滝薬師の石柱
井上不鳴（種痘術と産科を学んだ。種痘を施した人の数は、１万人近くにのぼる。）の碑

⑤ みずほ銀行徳島支店　北西側の建物の基壇に、焼夷弾が直撃したと思われる痕跡がある。

⑥ 高原ビル　戦災時の大火により亀裂が走った亀甲網入りガラスは、
現在もそのまま。徳島大空襲で残った数少ない建物の１つ。

12:00～　徳島県立博物館見学
13:00～　昼食
14:10～　徳島教会にて　平和旬間の祈りの集い
14:45～　徳島教会の皆さんとの交流
15:45　　徳島教会出発
19:15　　和泉教会到着
19:30～　和泉教会にてミサ

徳島教会の皆さんと交流できてとても良かったです。これからも交流を続けられたらと思います。
インターナショナルデーにお誘いしました。

感想

・学芸員の方に案内していただき、とても勉強になった。「新町川で一晩中水につかって避難した」との話を聞いて、恐怖の毎日を送っておられる方が今もおられることに憤りを覚えました。今も世界中で起こっている戦争に思いを寄せ、「戦争は絶対ダメ」と改めて強く思いました。

＊徳島大空襲とは

昭和 20 年(1945)7 月 4 日未明に、アメリカ軍が行った徳島市街地への無差別爆撃。
B29 爆撃機 129 機による激しい爆撃により、市街地は廃墟と化した。
徳島市街に投下された焼夷弾の数は、約 35 万 4664 本にのぼり、当時の徳島市の人口(11 万 5508 人)の約 3 倍にあたる。
空襲による死者数は約 1000 人、負傷者は約 2000 人、被災者は約 7 万人。
新町橋は焼け落ち、多くの建物が焼失した。

(今も残っている焼夷弾が突き刺さった跡)

＊なぜ徳島だったのか

アメリカ軍は徳島を、戦略上「日本の大都市のひとつである神戸・大阪に近接し、大都市に対する重要なひとつの食糧供給基地」ととらえられていた。

① 土塀の写真

② 被災後この下で生活していたという山門

③ 春日神社の灯篭と狛犬

⑤ みずほ銀行徳島支店

焼夷弾があたった跡

⑥ 高原ビル

爆風でひびが入った窓ガラス

⑦ 徳島教会にて

⑧徳島県立博物館にて

被災前後の写真

大阪から疎開した子どもたちが犠牲になった

シンポジウム　「主よ、いつまでですか」に参加して

社会福祉士　濵田（はまだ）　幸子（さちこ）

６月２９日（土）、サクラファミリアで行われた袴田（はかまだ）事件に関するシンポジウムに、シナピスから派遣され、参加しました。

袴田事件とは、無実の袴田　巌（いわお）さんが死刑囚とされた冤罪（えんざい）事件です。1966 年 6 月 30 日に、静岡県清水市（現静岡市清水区）のみそ製造会社の専務宅から出火し、全焼した現場から専務一家 4 人の遺体が発見されました。従業員の袴田 巌（いわお）さん（当時 30 歳）が、身に覚えがないにもかかわらず、元プロボクサーだからという偏見から犯人と決めつけられ、逮捕・起訴され、死刑判決が確定しています。

無実の罪で逮捕されたあと、自白を強要され、長期間拘置所に収容されていた巌さん。当初は、「無実なのだから必ず解放される」と信じ、前向きな気持ちで過ごしていましたが、再審請求をしてもなかなか受理されず、次第に心がむしばまれていきます。1984 年 12 月 24 日、巌さんは獄中でカトリックの洗礼を受けました。

2014 年 3 月 27 日、静岡地裁が巌さんの再審開始を決定し、死刑と拘置の執行を停止しました。巌さんは 47 年 7 か月ぶりに釈放されましたが、検察が即時抗告したため、再審開始が確定するまでさらに 9 年間を要しました。2023 年 10 月 27 日に静岡地裁で始まった再審は、15 回の公判を経て 2024 年 5 月 22 日に結審し、9 月 26 日に判決が言い渡されます。

シンポジストとして、袴田　巌さんの姉・袴田 秀子さん、「無実の死刑囚・袴田巌さんを救う会」副代表の門間 幸枝さんが登壇されました。秀子さんの表情や話し方は、91 歳とは思えないほど活気に満ちていました。秀子さんは前向きな思考を保ちながら、約 50 年間という想像を絶するような期間、獄中にいた巌さんの無実を信じ支え続けてきました。一時期、アルコールに依存したこともあったそうですが、乗り越えています。

死刑を宣告されたあと、巌さんはどのような気持ちで獄中の日々を過ごしてきたのでしょうか。
『主よ、いつまでですか』という書簡集が 1992 年「袴田巌さんを救う会」の編集で新教出版社から出版されているのを知り、購入させていただきました。無実であるのに解放されない苦悩、心の叫び、家族への思いなどが切々と綴られており、胸が張り裂ける思いで読ませていただきました。

秀子さんは、「本人の苦労を思うと私の苦労なんて」、また「一人では無理だった。皆の支援があったから･･･」との思いを伝えてくださいました。再審を求める巌さんのもとには多くの支援者や弁護団が集まり、門間 幸枝さんも巌さんの無実を心から信じ、再審請求を求め署名を集めるなどの活動を継続してきました。

この度のシンポジウムを通して、袴田事件の真相に触れ、冤罪を生み出し、無実の人が救済されない日本の警察、司法制度について大いに疑問を抱きました。冤罪で苦しみ悲鳴をあげている人の思いに耳を傾け、ともに寄り添うことが、どれほど当事者を勇気づけることになるのか。そのためには、まずは事件について「知ろうとする姿勢」が大切であると実感しました。

9 月 26 日の判決で、巌さんが無罪を勝ち取り自由の身となることを祈りながら、私も支援者の一人として検察庁へ嘆願書を送ろうと思います。

映画「夜明けへの道」を観て

大森　雄二

６月に十三（じゅうそう）の第七芸術劇場で「夜明けへの道」を観た。
監督のコ・パウ氏は、ミャンマーの国民的な俳優でもある人気者だ。映画は 2021 年 2 月、軍によるクーデターに抗議するデモに参加したコ・パウ氏が、身の危険を感じて山中の安全地帯に落ち着くまでを描いたドキュメンタリーだ。

ミャンマーの現状を日本で知ることは難しい。ウクライナやガザでさえ、子どもが犠牲となるような、心を揺さぶる出来事がなければ、日常としてスルーされる今、クーデターから三年半が過ぎたミャンマーについて、報道は少ない。
コ・パウ氏は怒りを込めて語る。スーチー氏を国家顧問として国造りを始めて五年、今回で三度目となる軍のクーデターに対し、もうたくさんだと。
今回を最後の民主化運動とし、子どもたちに同じ経験はさせまいと。そして、歴代の軍事政権を苦しめた少数民族との関係については、真の連邦制国家の中で共存を目指すと。事実、クーデター後にできた市民による「国民防衛隊」は、少数民族の武装勢力からトレーニングを受け、実力をつけてきた。

昨年 10 月以降、国軍は地方での拠点を失い続け、投降する兵士や亡命する兵士が後を絶たないそうだ。結果、今年 2 月に政府は徴兵令を出し、都市の若者を強制的に連行するような事態が起きている。軍が権力にしがみつく程に、犠牲者は増え続ける。徴兵を逃れ難民となる若者、国軍による空爆で住む場所を失う人々、そして、今回のクーデター以前から弾圧にさらされたロヒンギャ難民。

水を溜めた壺の穴から水が漏れていくのを見捨てずに、手をかざして穴を塞いでほしいとコ・パウ氏は語りかける。この映画で、私はコ・パウ氏と確かに出会った。出会った者として、できることを考え行動していきたい。

離れて暮らす息子とスマホで会話する場面が印象的だ。おもちゃの銃を片手に、「スーチー母さんのために強くなって、ミンアウンフライン（国軍司令官）をやっつける」と話す息子に、「それはすごいね。でも、食後の薬を飲むことを忘れないでね」と返すコ・パウ氏。
闘いはお父さんが済ますから、息子よ、健康に成長してほしいという気持ちに胸があつくなる。

障がい者委員会より

「シノダリティー」に通じる「合理的配慮」

障がい者委員会　石井　望

「障害者差別解消法」が改正され、今年の 4 月から民間事業所も、障害者への合理的配慮が義務化されました。シナピス・ニュース 6 月号の巻頭言で英（はなふさ）師が取り上げておられたので、関心をお持ちの方も多いと思います。

○教会の建物やハード面について

教会として、障害者のニーズについての理解や建築の「バリアフリー化（障害によりもたらされる障壁を解消する）」「ユニバーサルデザイン化（障害、年齢、性別、人種等にかかわらず誰もが利用しやすくする）」を進めるために、1991 年にカトリック中央協議会は**『ハンディキャップのある人びとを配慮した教会建築』**を出版しました。

出版元では品切れですが、おそらくあなたの教会の書架で見つかるでしょう。教会を新たに設計したり、改築するならばいまでも参考になります。

以後、高齢化社会も相まって建築基準や設計するかたの理解や配慮は当時よりずっと進み、多岐にわたるニーズに合わせて設備機器が生産されるようになったので選択肢も増えたようです。

○あなたの教会で「合理的配慮」はできていますか

内部疾患、知的障がい、神経発達症、聴覚障がいなどは、肢体障がいや視覚障がいと違い、本人が表明しなければ外見からはわかりません。いずれにせよ適切な理解・対応を得られず、「クレーマー」扱いされるのを嫌って表明するのを控える人は多くおられるようです。

○互いに意思を表明し、理解し、道を探す

障がい者への「合理的配慮」は、「思いやり」の問題ではなく、その人の存在・権利を大切にする、人としての基本的な姿勢です。ともに意思を表明し、理解し、歩む道を探すのは「シノダリティー」に通じる、教会の基本的姿勢でもあるでしょう。

○小教区での合理的配慮を進めるために障がい者委員会が準備していること

現時点では視覚障害者や聴覚障害者への情報保障について

a）障害を持つ方からの相談を受ける

b）教会からの情報保障の方法についての相談を受ける

c）具体的な改善法を当事者である障害者と教会責任者とが共に考えるためのサポートをする。

d）専門的知識や技術、経験ある方の協力を得るためにネットワークを作る。

e）小教区の情報保障に関する対応や機器の設置・メンテナンスのサポート

○ご相談ください　障がい者委員会：　dis@ostk.catholic.jp

障がい者委員会より

自己紹介

徳島教会所属　　嘉（よしみ）　凛太郎

2024 年の４月から、障がい者委員会のメンバーに加わりました徳島教会所属の嘉（よしみ）です。

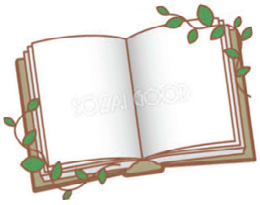
現在、私は精神科単科の民間病院に臨床心理士として勤務しており、病院やクリニックを受診した人や入院中の人のカウンセリングや心理検査を担当しています。
昨年度までは精神科デイケアにも勤務し、社会生活を送る利用者の方々の支援も行っていました。

徳島地区の小山助祭様から「大阪の人から、『高松の障がい者委員会の担当者と連絡とりたいのですが、どなたが委員ですか？』と問い合わせがありましたが、その役割の担当者はもとからいないのです。業界も近いから、嘉（よしみ）君やってくれませんか？ つなぎで良いですから」と言われたことがきっかけとなり、障がい者委員会のメンバーに加えていただくことになりました。。

最初は「教区の委員会か～。いっぱい仕事があって大変なのかなあ…」と心配しながら、4 月に初めての会議に参加しましたが、今は委員会に加わって良かったと思っています。
というのも、これまで教会の中で私には聞こえてなかった「合理的配慮」や「情報保障」について、豊富な実践例を知ることができたからです。
勇気が湧いてきました。ただし、すべてが上手くいっているわけではないという現実も教えていただきました。
最近私の働く現場では、「特権」という言葉がキーワードのひとつになっていて、これは「マジョリティに自動的に付与される利益」と説明されています。「自動ドア」にも例えられていて、利益を得ている人自身に「利益を得ている」という自覚はなく、利益を得られない人の苦しさは無視されやすいと言われています。もしかすると、教会の中でも「特権」によって隠されている人々の苦しみや困りごとがたくさんあるかもしれないな、と最近は思うようになりました。

これから障がい者委員会のメンバーとしての活動を通して、困りごとの解決の手助けができるようになりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

カトリック徳島教会



小冊子・リーフレットのご紹介

シナピス運営委員　嶋田至

シナピスの事務所には、さまざまな小冊子やリーフレットがあります。前回に続いて、そのなかから『聖書から見た死刑廃止』『平和を求めて、これを追い求めよ－憲法の危機と人間の尊厳－』『ガイドブック　沖縄から考える いのちとくらし』の3冊をご紹介します。

『聖書から見た死刑廃止』

（ホセ・ヨンパルト、ホアン・マシア、日本カトリック正義と平和協議会、2009年）

2008年におこなわれた、ホセ・ヨンパルト神父の「死刑－どうして廃止すべきなのか」と、ホアン・マシア神父の「死刑についてのキリスト教的考察」という２つの講演の記録です。「死刑を考えることは全キリスト者の問題である」と、ホセ・ヨンパルト神父は言います。死刑の問題を考えることはたんに法制度の是非を問うことに留まりません。人間の尊厳や死生観、癒しや「ゆるし」を考えることでもあります。死刑の廃止をめぐる背景を知るために恰好の小冊子です。

『平和を求めて、これを追い求めよ－憲法の危機と人間の尊厳－』

（日本カトリック正義と平和協議会、2017年）

2017年、憲法改正の動きが具体化する中で、教会内外の人々を対象として、憲法に関する連続講演会がおこなわれました。これはその記録集です。経済学の浜矩子さん、宗教学の島薗進さん、政治学の中野晃一さん、そして神学の光延一郎神父とマイケル・シーゲル神父といった各分野の専門家が講演者です。各々の研究分野の視点から、日本国憲法の重要性を解説しています。憲法と平和についての理解が深まる、とても読みごたえのある小冊子です。

『ガイドブック　沖縄から考える いのちとくらし』（社会活動センター・シナピス、2016年）

シナピスが制作した、沖縄学習についてのガイドブックです。沖縄について学ぶとき、何から始めたらいいのか、どのように始めたらいいのか、使えそうな資料はどこで入手するのかなど、学習会を始めるにあたって参考になる情報がコンパクトにまとめられています。さらに「辺野古や高江での座り込みに参加するにはどうすればいいのか」など、具体的な行動をとる際に参考となる情報も記載されています。

今後、他の小冊子やリーフレットについてもご紹介をしていきます。ご興味を持たれたらシナピスまでご連絡ください。無料で頒布しています。

※今回ご紹介した３つの小冊子は、いずれも100部以上の残部があります。ぜひご活用ください。

「社会の福音化をめざすキリス者のつどい」をふりかえって

～「霊における会話」の枠組みをつかって～

シナピス運営委員　嶋田 至

5 月 25 日に開催した「社会の福音化をめざすキリスト者のつどい（以下、「つどい」)」について、スタッフおよびボランティアで関わってくださった方々と、ふりかえりの場を持ちました。「つどい」には大勢の方々が会場やオンラインで参加してくださいましたが、主催者側の準備不足のためにさまざまなトラブルが生じ、皆さま（とくにオンライン参加の皆さま）には多大なご迷惑をおかけしました。誠に申し訳ありませんでした。

ふりかえるにあたって、シノドス（世界代表司教会議）で使われた「霊における会話」の枠組みを試してみました。これは、お互いの声に丁寧に耳を傾けあうことで、ダイナミックな識別を促すことを目的とした話しあいの方法です。まず祈りのなかで各人が「つどい」についてふりかえります。そして、一人ずつ自分が感じたことを語ります。他のメンバーは批判せずに、ただ傾聴します。全員が話し終えた後、今度は皆の話を聞いてあらためて感じたことを一人ずつ語ります。最後に、私たちがこれから大切にしたいことについて語りあいました。やってみて感じたのは、批判することなく聞きあえるので、自分の本音を語りやすくなることです。また、ちょっと厳しい意見も受け入れやすくなります。

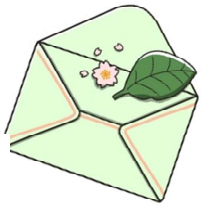
さて、ふりかえりのなかでもっとも共有されたことは、準備不足によって「つどい」を運営するスタッフたちに心の余裕が無くなったことです。オンラインでの運営については少なからず経験がありましたが、ハイブリッド形式の運営はあまり経験がありません。入念なリハーサルや専門知識を持った人たちの協力が必要だったのにもかかわらず、十分な準備ができていませんでした。また、要約筆記を滞りなくおこなうための準備も疎かでした。要約筆記のボランティアの方々が、「ピンをつけてください」などのメッセージを出そうにも、必要なサポートが得られずにうまくできなかったということでした。事前に簡単な打ち合わせはしたものの、具体的な事象を洗い出すまでに到らず、実際の場面ではボランティアの方々にご迷惑をかけてしまいました。また、会場に集まった人たちとオンラインで参加した人たちとの共通の対話を、どのように実施していくのかの構想の共有も欠けていたようです。これらの準備不足がさまざまなトラブルを引き起こし、予定していた進行を大きく妨げたことが、ふりかえりの場で明らかになっていきました。

また、スタッフやボランティアの方々がトラブル解消に向けて、裏方で頑張ってくれていたものの、誰がどのように頑張っていたのかも、十分に共有できていなかったようです。ふりかえるなかで、どんなことが起きていたのか、参加者やボランティアの人たちがどんな思いでいたのかを、あらためて把握することができました。これから大切にしたいこととしては、「もっと話しあおう」「助けを求めることも大事だ」「できるだけ声をかけるようにしよう」などの発言がありました。

「つどい」に参加された人が帰り際に、「今回のことにめげずに続けてください」と声をかけてくれたそうです。皆でふりかえることで、あらためて私たちの役割やまわりからの期待に気づき、チームワークのあり方を見直す機会となりました。本田神父のお話にあった、「虐げられている人たちの視点に立つ」という、社会福音化の原点に立ち返ることの大切さも、あらためて認識できたと思います。

皆さま、引き続きご支援をお願いいたします。

シナピスホーム便り



シナピス事務局　山田　直保子

読者の皆さま、お久しぶりです。
毎年、暑い時期になると、毎週土曜日に開催しているカフェに来ていただいたお客様も汗だくで、申し訳なく思うのですが、そんな中の６月 22 日にランチ開催日を迎えました。
「ランチ」はとても忙しく、皆様がどれだけ楽しみにしてくださっているのかよく伝わり、担当の難民移住者も嬉しい悲鳴をあげています。
みんなプロの腕前とかではなく、普通の家庭料理なのですが、日本人の口に合うよう一生懸命考えられ、試行錯誤しながら何度も作って味見をしては、色んな意見を出し合います。
「ランチ」を開催して３年経ちますが、コック長担当の難民移住者がお客様に料理をお出しして、メニューを説明し、別の難民移住者が食べ終わったお皿をさげ、ドリンクメニューをお見せして注文を受け、お出しする。洗い物や片づけは別の人が自主的に動く。こういった流れがすっかり出来上がり、大きなトラブルがなくなってきて、みんな穏やかにお客様と触れ合い、常連さんとは近所情報や冗談も話したり、以前よりもすごくリラックスしている様子が見られます。

ブラジル料理・フェイジョン

６月はブラジル料理で、担当の C さんはシャイで人見知りなので、料理の説明を求めても恥ずかしいので毎回嫌がりますが、今回は何も言われなくても自ら説明してくれていたので、本当にびっくりしました。
私が逐一伝えなくても自分から動いてくれるというのは、私が最も望んでいたことですが一番難しいことだったので、本当に嬉しく思いました。
今回は初めてチキンとチーズのコロッケに挑戦！お客様が大絶賛してくださり、すごく嬉しそうでした。

日ごとに元気を失っていく唐辛子です

さてホームでは、ハーブや唐辛子などの野菜を育てて、ランチで使っていたのですが、最近ではこの暑い気候のせいで屋上の家庭菜園が枯れはてて、種からやり直しても育たず苦労しています。
色々試したりしましたが、「暑すぎる！」という結論に達して諦めました。過酷な環境にも強いハーブなども今年は全部やられて、なぜか全然育ちません。去年は元気よく育ってくれたのですが、暑さも違うのでしょうか？今年は全く育たないのです。試行錯誤で土を変えたり、知識を得ようとインターネットを駆使して調べてもよくわからないのです。お客様に相談してアドバイスをいただき、試みてもダメです。家庭菜園に詳しい方！暑い時はどのような対策をされているのか育て方の情報をホームの難民移住者たちに教えてあげてくださいね。

事務局こぼれ話

ビスカルド篤子

7月8日　車椅子のプレゼント

独りで老母の世話をする初老の息子さんから電話がありました。「車椅子ないでしょうか。母が圧迫骨折をしてしまって」。この母と息子は、過疎の村で孤立しがちに暮らしています。私はSNSを使って車椅子の提供を呼びかけました。すると2時間もしないうちに知り合いのYさんからお電話があり、すぐにシナピスまで車椅子を持ってきてくださいました。折り畳んで乗用車に積める使い勝手のよいものです。お父さん、お義母さんのために使われたとのことで、車椅子は汚れも傷みもなく丁寧に使われていました。私たちはすぐに車椅子を送り、翌日には、お母さんから喜びの電話がありました。Yさん、ありがとうございました。

7月10日　ナイジェリア人と朝の熱いコーヒーを

朝、ふらりとナイジェリア人のJさんが訪ねてきました。彼は、一日も早い在留特別許可を求めてずっと署名運動をしていました。その日は、「集めた署名を司祭に祝福してもらった」と言ってシナピスに立ち寄ったのでした。私たちは一緒にコーヒーを飲みながらお喋りをしました。

Jさんが通うなみはや教会は、信者さんが温かくて居心地がよいそうです。
また彼は同胞の人たちに会うために玉造教会の英語のミサにもよくあずかります。

同胞と言っても、ヨルバ族・イボ族・フラニ族･･･と、民族が異なるので、コミュニティも一括りにはならないそうです。お互い使う言葉が違うため、ナイジェリア人は意思疎通の手段として英語を使うのだとJさんは教えてくれました。そういえば、私の知るナイジェリア人たちはどの人も私の下手な英語を笑ったりせずに、言わんとする内容を理解しようとしてくれます。詩篇を空で唱えられる人もいるほど、神に全てを委ねる信仰の篤い人が多く、些細なことにこだわらない大らかさを感じます。

「おいしいコーヒーをありがと」とJさん。豊かな一日の始まりをもたらしてくれました。

アツコのアは、アカンのア

月曜は私以外のスタッフたちの公休日なので、私が一人で事務局を切り盛りしている。
アツコでは事務仕事は立ち行かんと心配する人たちが、月曜めがけてボランティアに来て助けてくださる。感謝。
でもたまにお助けゼロの日もある。そんな日は、難民さんたちが私のそばで電話番をし、荷物の受け取りや来客のお茶出しをする。私に代わって弁当を買いに走ってくれる人もいる。
難民さんたちはしょっちゅう私に「大丈夫？」「私がやりましょうか」と声をかけてくるので、みんな私のアカンぶりを熟知しているようだ。なかには「疲れちゃいかん」と、私の机にバナナをお供えする人まで出てくるしまつだ。
こうしてみんなが寄り合って、“あかんアツコを支えるの図”ができあがる。
月曜日。朝があり夕があり、アツコは「すんません」「ありがとう」を連発して、一日を終えている。

活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。

お使いにならない外国語の聖書があれば、ご寄付ください！

拘置所や刑務所、入管などに拘禁されている海外出身の人たちが、聖書を求めています
＊日本語の聖書は不要です
☎06-6942-1784

シナピス公式
さまざまなお知らせや情報を発信！
友達追加は 👇 QR コードから 👇

CATHOLIC_OSAKA_SINAPIS_

◀◀◀ **HP はこちらから**
https://sinapis.osaka.catholic.jp/

社会活動センター・シナピス　夏季休暇
8 月 10 日（土）から 18 日（日）まで閉館します
緊急連絡先：090-8886-6059

あとがき

もうすぐ平和旬間です。1982 年に平和旬間が定められて以来、毎年各地で平和ミサや祈り、対話や学習会などが続けられてきました。今では教会の行事としてすっかり定着したように思います。しかし私たちのまわりで、平和が脅かされる出来事は絶えません。さまざまな話題が日々ニュースで伝えられるたびに、心がざわざわとします。

「憎悪のピラミッド」という考え方があるそうです。戦争や虐殺は突然おこるわけでなく、はじめはちょっとした冗談やうわさ話から始まるのだそうです。でも、しだいに嘲笑や分断を招き、差別や排除を強め、暴力に発展して、やがて戦争を招くということです。私たちは、今起きている不条理な出来事に微力ながらも取り組んでいますが、同時に自らを点検することも大切なのでしょう。

誰かを知らず知らず傷つけてはいないか、度を越えた批判、無視や無関心、他者を貶めたり追い込んだりしていないだろうか。折に触れて、そんな時間を持つことができれば、少しでも皆が暮らしやすい世界をつくるために役立つのかもしれません。社会の福音化を進めるためには、まず自分自身が変わることが必要なのだろうと思います。（Ｉ）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動
・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携
◆学習会研修会の企画
◆こども基金
世界・日本のこどもたちへの援助
◆日本カトリック司教協議会との連携
正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣
◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ
◆難民移住移動者支援
難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル
☎ 06-6941-4999

アクセス
〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22
カトリック大阪高松大司教区事務局内

●公共交通機関ご利用の場合
JR 森ノ宮駅より　約 1000m
地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より　約 800m
JR 玉造駅より　約 1000m
地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m
●車でお越しの場合
阪神高速１３号東大阪線法円坂出口
法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします
□郵便振替　00960-7-61419
加入者名　カトリック大阪大司教区シナピス
□三井住友銀行　玉造支店　普通　9401958
カトリック大阪大司教区　シナピス
代表役員　前田万葉
□オンラインはこちら　➡➡➡